

風を詠む

大西 淳子

花鳥風月のなかで、一番捉えがたいのは風ではないだろうか。なにしろ風は目に見えない。つかんだと思っても逃げる。しかも、本当に逃げたかどうか確かめる術もない。

それでも、風は万葉の昔から現代に至るまで、すこしも陳腐化することなく、繰り返し詩歌に詠まれている。今、手元に風をタイトルに含んだ歌集が二冊ある。佐藤モニカ『白亜紀の風』と野田かおり『風を待つ日の』である。風は現代短歌の中でどのように詠まれているのだろうか。

海風よき日は空もひるがへりあをき樹木に結ぶその端

佐藤モニカ『白亜紀の風』

空へ^とはすべて開かれ駆け抜ける風あり
これは白亜紀の風

一首目、明るく爽やかな海風が一面の青空を旗のようになびかせ、その端を樹木に結ぶ。「結ぶ」という動詞により、身体感覚を伴い、見事に風を可視化することに成功している。歌集の巻頭に置かれたこの歌で、読者は心地よい風を感じるのだ。

二首目、タイトルとなった歌。母音のaを多く含み開放感が感じられる。またカ行音の繰り返しにより、スピード感もありリズムカールである。結句に「白亜紀」を登場させることで、時空を超え、まるでタイムスリップしたかのようだ。

佐藤は、沖繩の自然豊かな地で子育てをしている。あとがきに、「俄万智さんに教わった電動自転車に乗り、息子と風を感じながら走るのが、今の私の小さな幸せです」と書いている。実際に全身で大自然の風を感じながら生活しているようだ。

触れたればひんやり安心するやうなナイフになりたし春風のなか

野田かおり『風を待つ日の』

振り上げてみれば傾斜のゆるやかな黒板
といふ原野、風を待つ日の

一首目、春のやさしいやわらかな風のなか、危険なナイフになりたいという。しかもそのナイフの冷たさは主体に安心をもたらすものようだ。この風はメタファーだろう。空気を読むことを求められ、波風を立てないよう

生きなければならぬ現代、体温のないナイフに安らぎを感じ、感情を断ち切るうとしている。

二首目、まず短歌のリズムで一読すると結句で躓いてしまうが、私は四句を十音、つまり「黒板といふ原野」を早口に言い、五七五十七で読んだ。難解だが、私なりの解釈を試みる。表面と裏面がひっくり返るタイプの黒板を振り上げた時、そこに原野を見る。主体はこの日、風が吹くのを待っている。この風もメタファーで、何かが動き出すのを待っているようだ。原野は、これから開拓されてゆくのだろうか。

野田は、あとがきの最後を「明るい、良き風が吹いてきますように」と結んでいる。野田にとつて風は、人生のあらゆる局面に吹き、精神的な意味合いが大きいようだ。小さな心の揺れには微風が、逆境には逆風が吹き、社会秩序を守る春風のなかでは無機物となり風を感じず、時には人生をリセットして無風となり、新しい風が吹くのを待つ。

不可視の風を可視化したり、時空を超えることで、超現実の世界を表現する。また、メタファーに使うことで、さまざまな心情を表現する。これらの表現の工夫により、まだまだ新しい風を生み出すことができそうだ。